

令和5年度 学校関係者評価書		【学校教育目標】思いやりをもち、自ら考え、意欲的に取り組む子の育成		【めざす学校像】安心して過ごせる学校「毎日が楽しく、明日が待たれる学校」	
評価項目	本年度の教育活動の目標と 評価のための具体的な指標	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
(1)主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくり	「分かる喜び」「学ぶ楽しさ」を実現する授業づくり 【目標】自分の考えを話したり友達の考えを聞いたりしながら、学び合いのある授業づくりに取り組み、個に学びを定着させる。 【指標】公開授業を年3回（全体研修会3回事前研3回）行う。 自主研修に関する内容を紙面にて広めたり、学期に1回以上行ったりする。 職員アンケート2において、肯定的な回答が80%以上。 児童アンケート1、2において、肯定的な回答「はい」「どちらかといえばはい」が80%以上。 算数アンケート（2）において、肯定的な回答「はい」「どちらかといえばはい」が80%以上。	B	◎職員アンケート2「各授業で「めあて」を明確に示し、「振り返り」活動を行っている」項目で肯定的回答が88%となっており、教員各々が学びの定着を確認している。 ▲児童アンケート1「授業で友達の見聞を聞いて新しい考えに気付いている」項目では、肯定的回答が89.6%となっており、研修テーマである学び合いの中で学習を進めている様子がうかがえる。しかし児童アンケート2「授業で自分の意見を発表している」では、肯定的回答が66.4%にとどまっているため、発表する児童が偏っていたり、みんなの前で話すことを好まない児童が多かったりする実態がうかがえる。ペアや班での話し合いは好むが、クラス全体となると躊躇してしまう児童が多いのではないかと考えられる。 ○算数アンケート（2）「算数の学習で最初の授業ではわからない問題も最後の授業ではわかるようになっていく」では肯定的意見が4年97.4%、5年83.4%、6年88.6%となり、学びの定着を実感している。また算数アンケート（1）「算数を楽しんでいるのはどんな時か」を問うと、わからない問題がわかるようになった時を選ぶ児童が多く、次いで自分で考えるや友達と考えるを選ぶ児童が多くなっている。 ◎学期に1回以上の自主研修会を開催したり、紙面にてひろめることができた。様々な技術や考え方を学び合うことができた。また全体研修会3回をし、課題や目当ての設定、子どもの意見の取り上げ方等を学び合ったりできた。	・職員アンケート2での目標達成がよい。 ・主体的な学びの実現のためには、児童がその授業で何を学ぶのか理解した上で活動が必要である。先生方がそのことを理解し、丁寧に取り組んでいることが児童の意欲につながっている。 ・成果の分析はできており評価できる。 ・職員・児童のアンケートにおける成果と課題の分析結果を次年度の目標と指標に生かしていくとよい。 ・課題が十分に見出せていないので、改善点につなげるにはもう一歩深掘し、やり方はどうであったか、取り組みはどうであったかを検証するとよい。 ・クラス全体での発表が苦手とする児童は恥ずかしさや間違えを心配するが、自分で意見をまとめられなかったり、理解の難しい児童もいると思われるので支援をお願いしたい。 ・特に算数は積み重ねの教科なので、できるだけ嫌にならず、楽しさを感じられるような工夫をしてほしい。	・朝の学習時間に基本的な問題の定着を目指していきたい。また、家庭学習で着実に復習ができるようにし、個別に対応する時間の確保、習熟の時間（まとめや振り返り）の確保をできるようにしていく。 ・授業の中でも、ペアや班学習など子ども達同士の教え合いを様々な教科で取り入れていく。 ・活用の授業よりも基本的な内容の授業に重点を置いていきたい。
	教育ICTの日常化 【目標】ICT機器を用いた学び合いのある授業づくり 【指標】 1週3回以上 教師はクロームブックを授業の中で使用する。 2週3回以上 児童はクロームブックを授業の中で使用する。 3各教員が年に1度 ICT支援員を活用する。 4全体研修会や自主研修会を定期的に行い、職員のICT活用指導力の向上を図る。 5夏冬の長期休業中にクロームブックによる課題を実施する。 7職員アンケート3において、肯定的な回答が80%以上。 8算数アンケート5において、肯定的な回答「はい」「どちらかといえばはい」が80%以上。	A	1◎ 2○ 学年による発達段階の差があるため、効果的と考えられる場面で使用すればよい。 3○ 低学年を中心にオクリンクやグーグルワークスペースの使用法講座で活用できた。 4○ 紹介できるサイトやアプリ、教材が多岐に渡るため、全ての紹介は難しい。 5○ 例年のデジタル日記やドリルに加え、今年は、家庭学習の時間を記録する「私の学び確認シート」を実施した。今後、効果を検証する。 7○ 「あなたは児童の理解が深まるように、授業でICT機器を有効活用している。」82% 8◎ 「ICT機器を使うと、算数の学習に役立つと感じますか？」 4年94.7% 5年88.1% 6年93.2% 特に、5年生は他者の考えの視覚化と共有化に力を入れて学習してきたため、「友達の考えや自分の考えが分かりやすくなる」のポイントが48.6%と最も高いスコアだった。6年生は、デジタル教科書をプロジェクターに提示するスタイルだったため、「図や文字が大きくて、今どきの課題に取り組んでいるかが分かりやすい。」のポイントが62.2%と高いスコアだった。	・算数の授業でICTが効果的に活用されていてよい。 ・よい成果が出ているので、継続して取り組んでいってほしい。 ・「見て分かる」ことは重要。図形単元等でICTの効力が活かされている。 ・ICTが導入され、先生もどんどん使いこなしていつている。ますます効果的な授業になることを期待している。	・ICT機器の積極的な活用が主体的・対話的で深い学びにつながるのかどうかを検証する。 →使い方によって、児童が主体的に学ぶことは可能だと考える。反対に、対話的な授業にならない場合もある。ICT機器の使用の有無が論点ではなく、今後はどのように使用すると効果的かという視点に転換していきたい。 ・主観が入らないような、達成状況の指標を設ける。 →主観を完全に取り除くには、厳格な目標数値の上に対象者である教師や児童に厳密なアンケートを実施せざるを得ない。あるICT機器の授業に対して、一方では「ICT機器を効果的に使用できた。」と判断する者もいれば、「効果的とは言えない。」と考える者もいる。主観がある程度入ることは仕方がないといえる。
	図書館教育の充実 【目標】豊かな心を育む読書活動の推進 【指標】図書委員による推進活動を年間を通して実施、教員による読み聞かせ「お話プレゼント」を年3回実施する（低学年において）。 巡回指導員を活用し、ブックトーク等を各学年で1回以上実施する。 テーマに沿ったコーナーを定期的に図書室に設置する。 平均貸出冊数を年間で低学年30冊以上、高学年20冊以上とする。 児童アンケート3において、本が好きだと回答する児童が80%以上。	C	○今年度の貸し出し冊数は、昨年度に比べ約5割程度多くなっている。子ども達が図書室の本をたくさん読んでいくことがうかがえる。 ○図書委員会では、1学期に図書館クイズ、2学期には読書郵便に取り組むことができた。 ○「お話プレゼント」を、今年度は低学年で年3回実施した。朝の読み聞かせでは、各担任で行ったり希望学年がボランティアを活用し実施した。 ○巡回指導員を活用し、希望学年でブックトークを行ったり、テーマに沿ったコーナーを定期的に図書室に設置したりすることができた。 ▲児童アンケート3において、肯定的回答が63.2%と目標の80%に及ばなかった。ここ数年、子どもたちのICTの活用能力が向上し、調べ学習等をインターネットで行うことが多く、以前より図書室を活用する機会が減っている。図書委員会の取り組みなどで図書室利用の機会を増やしているものの、根本的な解決には至っていない。国語科等の学習内容の改善を含め、課題解決に向け協議していく必要があるのではないかと。	・図書委員会、巡回指導員等による取り組みや活用の成果に評価できる。 ・学校で様々な取り組みを通して本のおもしろさに触れる機会をふやしてもらっていてありがたい。 ・デジタルブックでは本に比べて印象が浅いと感じており、実際に本を手にとって読むことを伝えていってほしい。 ・時代の流れもあるのでタブレットから文字に接すると言う学習スタイルを取り入れていくのもいいかもしれない。 ・学校だけでなく、「10分以上読書する児童の割合」が国や県に比べて低いという結果だった。読書習慣は国語学力にも関係するので朝の授業前など各学年で取り組んでどうか。 ・よみかせボランティアの方からは児童たちの反応も良くていいへん有意義な時間であると聞いた。 ・よみかせボランティアの活用が減ってきているのは残念。 ・高学年が低学年に読み聞かせる機会を設けてはどうか。	・図書室の貸出冊数が大幅に伸びていることから、引き続き貸し出し状況を見える化し取り組んでいってほしい。 ・本が好きな児童の割合が目標に到達していないことについて、協議する必要があるのかもしれない。この結果からわかることや原因は何なのか、改善するにはどんな方法が必要なのかを意志共有していかなければ、進んでいかないと感じた。
(2)互いを尊重し、安心できる人間関係づくり	人権を尊重する態度の育成 【目標】自尊感情を高め相手のことを思いやれる心の育成 【指標】毎月「人権の日」を設定し、人権について自分を見つめる機会を設ける。 人権の授業を各クラスで月1回以上行う 児童アンケート「4 困っている仲間を助けることができているか」「5 いじめはどんな理由があってもしてはいけないと思うか」「6 いじめを見たり聞いたりしたときやめるように言ったり誰かに伝えたりできるか」「9 周りの人の気持ちを考えて行動できているか」「13 自分にはよいところがあると思うか」で肯定的な回答85%以上。 教職員の人権意識を高めるための研修を行う。年間3回以上。	B	○毎月10日（または11日）を人権の日とし、友達や自分を大切にすることを考えてきた。この日は児童に定着していると考えてる。また、毎月掲示板に人権に関する詩や呼びかけを掲示したり、児童に呼びかけ友達のいいところやうれしかった言葉を募集したものを掲示したりして、人権について考えるきっかけとした。掲示の前で立ち止まって読む児童の姿や、クラスでそのことを話題にして話す取り組みも見られた。 ○人権の授業を各クラスで行った。さらに授業参観でも行い、保護者に取り組むを知ってもらうことができた。 ○4月に講師を招いた自主研修会を行い、人権レポートの書き方や人権教育で行うことについて学んだ。2学期は、3、5年が人権教育公開授業を行い、事後検討会で意見を出し合い、今後の取り組みの在り方について学んだ。 ○夏休み、2月に人権レポート研修会を行い、一人ひとりを大切ににする学級、集団を目指した取り組みについて学んだ。 ○児童アンケート4、5、6においては、どの学年も肯定的回答が90%以上あった。9については一学年が85%を下回った。周りの人の気持ちを考えることの大切さについて今後も取り組んでいく必要がある。 ▲児童アンケート13については目標の85%を上回ったのは一学年のみであった。学年がすすむにつれ、自己肯定感を持っていない現状がみられる。自分らしさやよいところを認め合うことができる仲間づくりを今後も進めていくことが必要である。	・人権の日の設定、人権学習への取り組み、教職員の研修等の実施など評価できる。 ・人権学習の時だけ考えるのではなく、毎月人権の日を設定して自分も他人も大切にすることが当たり前になるような取り組みをしていることがすばらしい。 ・人権の掲示板は定期的に内容が変わっていき、子ども達の意識を高め、興味を引くように工夫されておりとても良い取り組みである。 ・自己肯定感については、他人よりすぐれている部分ということではなく、自分の特徴や好きなことを肯定的に見ることができるようになっていくとよいのではないかと。 ・自分の良いところは、他人に褒めてもらったり、探してもらい気付かせるという手段もある。 ・人権については、大人の生き方が子どもに影響していくので、児童への取り組みを通して保護者への啓発もしてほしい。	・人権学習や毎月の人権の日だけでなく、自分も他人も大切にすることが当たり前になるような取り組みを今後も日ごろから大切にしていきたい。 ・自分のよいところや友だちのよいところを見つけたら話し合ったりする活動に引き続き取り組んでいきたい。 ・各学年の取り組みを集会、放送、掲示などの方法で知らせるのと同時に、保護者にもたより、HPなどの方法を活用して、啓発していく。
	いじめのない学校づくり 【指標】組織的な対応と情報の共有を徹底する。児童アンケート「5いじめはどんな理由があってもしてはいけない」と考える児童100%。 児童アンケート「6いじめを見たり聞いたりした時に、やめるように言ったり、誰かに伝えたりすることが出来ますか」と考える児童が90%以上。	B	○学期に一回いじめアンケートを実施し、児童の実態を把握することに努め、気になる児童には迅速に対応した。スクールライフサポーターと連携し、家庭訪問や学校での見守り等、不登校（傾向）児童の対応にもあたった。今年度発覚したいじめについては、素早い対応を心がけ、職員との共通理解を図った。月に1度「児童の様子」を共有する時間を設け、全職員で情報共有を行った。 ○児童アンケート5は、R4年度96%→R5年度96.8%（前年比 +0.8%）、児童アンケート6は、R4年度89%→R5年度92.8%（前年比 +3.8%）と、どちらの項目も前年比を上回った。ただし、児童アンケート5については、100%を目指していることもあり、いじめはいかなる理由があってもやってはいけないということを全職員で日常的に機会をとらえ指導していく必要がある。いじめの未然防止に向けた取り組みはもちろんのこと、いじめの早期発見、いじめ発覚後の事実確認、及び全校で統一した指導方針の決定をすばやく行う体制のもと、複数の職員での対応を今後も行っていく。	・児童アンケートを実施し、全職員がいじめの重大さを認識して、未然防止をし、発覚後は対応をしていてよい。 ・アンケート結果がよくなってきていてよい。100%を目指して引き続き指導をお願いしたい。 ・最も気を遣う項目と思われるので、実施計画に対して実行度合いを長い目で見守っていく必要がある。 ・担任の視点だけでなく、多くの教職員が気になる点を出し合える風通しのよい職場であることも大切である。	・いじめアンケートで「いじめがあったときに注意できますか」の項目に対して学年によっては「いいえ」の項目を選び、「関わりたくない」や「言ってもなくならない」と回答する児童が数名いた。学級でいじめが起こった時に、自分ができることを行い、いじめをみんなで無くしていくという思いを育てていきたい。

評価項目	本年度の教育活動の目標と 評価のための具体的な指標	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
(3)一人ひとりに応じた指導・支援の体制づくり	組織的・継続的な個に応じた特別支援教育の工夫 【目標】 個の理解を深め、それに応じた支援の方向性や支援方法を共有する。 【指標】 ・該当児童の支援計画、指導計画作成を100%とする。 ・支援が必要と思われる児童の情報交流会を月に1回実施する ・必要に応じて校内支援委員会や支援会議、ケース会議を開催する。 ・外部機関と連携し、また、講師を招くなどして具体的な支援方法を還流するとともに研修会を行う。	A	○前年度からの引継ぎ事項とともに担任が観察した様子等を保護者に確認のもと、前期の到達目標や手立て等の支援計画や指導計画を作成した。後期はそれらを振り返りながら更なる手立てを考え、実施してきた。 ○支援が必要と思われる児童の様子等を各担任から報告し、全職員で情報共有する時間を定期的に設定することで、児童に対して必要な場面で適切かつきめ細かな対応を行うことができた。 ○児童の様子や、保護者とのやりとりなどを通して、必要と考えられるときにすみやかに支援委員会を開き、ケース会議や保護者との支援会議を開催してきた。特に年度初め、学期初め、長期休業の前、年度末には必ず実施し支援の方向性や方法を検討できた。 ○講師を招き、具体的な支援方法等を学ぶ研修会を実施した。また、外部関係機関からの可能な限り情報収集しそれをもとに、支援方法を検討する機会もあった。	・非常衣よい取り組みができています。 ・支援学級の児童が落ち着いて学んでいる姿を見て、児童が安心して過ごしている証拠だと感じる。丁寧な指導の成果である。 ・支援が必要な児童に対し全職員が情報を共有し対応できておりよい。 ・外部講師や保護者、関係機関等との支援体制が確立されていて成果として向上している。 ・成果を数値化できるとよい。	・支援学級籍の児童をはじめ、協力学級で支援が必要と思われる児童の困り感を担任が中心となって把握することを大事にしていく。その際に、保護者としっかりと連絡をとりながら対応策を練り、進めていく。 ・今後も児童一人ひとりの情報を丁寧に交流し、全教職員が共有していく。担任以外の教職員からの関わりへとつなげていき、教員全員が目で児童を見守っていく。 ・研修会や支援会議等の基準とする回数は数値としてあげられる。しかし、必要に応じての開催が多いため、変動はある。
(4)児童生徒理解を基盤とした生徒指導	組織的で統一感をもった生徒指導 【目標】 統一感をもった指導がなされるよう、情報共有を徹底する。 【指標】 日ごろから、同じ学年の教員で情報共有を行う。 問題事象があった場合には、学年・学年部・担当者・関係者・管理職ですばやく情報共有を行う。 職員アンケート「5 今年度の生活指導の重点『あいさつ』『トイレのスリッパをそろえる』『時間いっぱい掃除をする』について意識して取り組み、子どもたちにその意義を考えさせて、指導している」「6学校は問題行動が発生したとき、関係者と情報共有をして迅速に対応・指導し、解決に取んでいる」について意識して取り組み、子どもたちにその意義を考えさせて、肯定的な回答が85%以上。	A	○教職員アンケートで、すべての項目で85%を達成することができていた。 アンケート5、6どちらも肯定的な回答が100%だった。アンケート6の「学校は問題行動が発生したとき、関係者と情報共有をして迅速に対応・指導し、解決に向け取り組んでいる」という項目については、教員が素早く問題を共有し、行動することで、問題行動の予防につながるため、これからも意識して取り組んでいく必要がある。	・目標達成ができておりよい。今後は100%をめざしてほしい。 ・教員が同じ視点で指導することを意識し、共有できているのがよい。 ・学校内で非常に良い活動ができているので、「組織的」という範囲をさらに広げて、保護者を巻き込んだ生徒指導にまでいけると、もっと素晴らしい成果が生まれるのではないかと期待している。 ・挨拶に関しては、高学年になってくると恥ずかしさで言えなくなる児童が増えてくるので習慣づけていくことを大切にしてほしい。	・生徒指導上の問題について、全体で情報を共有し指導に当たることができた。今後は、保護者への働きかけも行いながら、学校と保護者との両輪で、子どもの成長を支援できるようにしていく。 ・「挨拶」「掃除」などの大切さを教員が子どもたちに伝えていく。
	決まりを守り、人の気持ちを考えながら過ごすことができる学校 【目標】 人の気持ちを考えながら行動することができる子どもの育成 【指標】 児童・保護者アンケートにおいて、7「自分からあいさつができる」、8「時間を守る行動を意識している」、9「人の気持ちを考えて行動することができる」割合が85%以上。	B	○児童アンケート7、9の項目で、85%を達成することができた。しかし、アンケート8の「時間を守る行動を意識している」は、84.8%だった。 7「自分からあいさつができる」R4年度91%→R5年度86.4%（前年比 - 4.6%） 8「時間を守る行動を意識している」R4年度85%→R5年度84.8%（前年比 - 0.2%） 9「人の気持ちを考えて行動することができる」R4年度84%→R5年度87.2%（前年比 +3.2%） ▲すべての項目が目標の85%付近であり、中でも、アンケート7の「自分からあいさつができる」については、昨年度よりも4.6%下がっている。あいさつ運動の様子を見ていても、あいさつができていない児童が多い。あいさつの大切さを再度伝えて、あいさつをするのが当たり前、そのような認識が生まれるように、全職員で指導に当たりたい。さらに、学校の中はもちろんのこと、学校外でも時間を守って行動することの大切さを意識付けしていく必要があると考える。	・「自分からあいさつをする」のポイントが下がって残念である。時間を守ったり、あいさつをしたりといった主体的な行動ができるように、その大切さを理解させたうえで実際にできるよう指導していつてほしい。 ・あいさつをすることで声を出して他人と接することに馴染んでくることもある。あいさつと「ありがとう」をいえる児童にしていってほしい。 ・家庭でもしつけとして子どもに向き合っていくとよい。 ・自分達も、気持ちが前向きな時は、明るいあいさつをするし、ふさぎ込んでいるときは声のトーンが下がる。マナーや習慣の面の指導に加え、児童の心のバロメーターととらえてもよい。 ・月に1回だが、引き続き校門前のあいさつ運動を続けていきたい。コロナ禍に比べると前を向いて元気に登校する児童が増えた。	あいさつ運動を引き続き行うが、取組方法の工夫、改善を行う。また、家庭への協力も呼びかけていく。
(5)安全で安心な学びの場づくり	安全教育 【目標】 主体的に安全を守ろうとする子どもの育成 【指標】 年3回避難訓練を実施し、安全な学校生活を過ごすために、自分で工夫をしたり、訓練に積極的に取り組んだりする児童が90%以上。	B	○前年度と比べて、地震や火事、洪水などの災害に備え、家庭で話し合ったり、防災カルテを確認する児童の割合は、昨年度とほぼ同程度であった。R4:61.5%→R5:60.8%（児童アンケート）。避難訓練後、各学級担任からの指導が丁寧に行われていたこと、避難訓練実施毎に、災害時に備えて家庭で話し合いをするよう伝えていたことが児童の防災意識を高めることにつながった。 ▲安全な学校生活を過ごすために、自分で工夫をしたり、訓練に積極的に取り組んだりする児童の割合が85%程度と、年度当初の指標である90%に届いていない。各学級で担任の指示に従って避難をする設定で行っていたため、児童が自分で考えながら行動できる避難訓練に取り組む機会を取り入れるとともに、防災意識を高める手立てを工夫していく必要がある。	・抜き打ちの避難訓練ではそれぞれが自分で考えて行動しており、とても良い経験になる。特に石川の地震直後ということもあり、時期的にも自分事としてとらえてよかった。 ・訓練の時、だらだらとしている児童もいた。全員が真剣に取り組めるよう指導をしてほしい。 ・訓練では教職員の的確なる指導手順で児童に体得させていく工夫も入れていつてほしい。 ・高学年が低学年を誘導できるレベルになることを目指して、高学年がとるべき行動の内容を充実させていくともっと成果が期待できる。	・避難訓練時の放送や鈴鹿市の緊急地震速報やJアラートのサイレンの試験放送に合わせて、子どもたちは素早く行動できるようになってきている。今後も定期的に避難訓練等を実施していきながら、子どもたちが着実に避難行動を身につけてられるよう日頃から指導を継続していく。 さらに、防災ノート等を活用しながら、具体的な場面をイメージし、話し合い活動を取り入れながら、防災意識の高揚を図っていきたい。
	保護者・地域と連携した安全安心対策 【目標】 地域との連携体制の構築 【指標】 保護者、学校運営協議会、まちづくり協議会、自治会等、地域へ学校からの情報をメール配信で発信して情報共有を行ったり、協力の依頼を行ったりする。	A	○地域の見守りボランティアの方にメール登録を依頼し、毎日の下校時刻をメール配信して知らせている。連携体制ができてきた。 ○安全安心パトロール隊の方との情報交換から児童の安全確保へつなげることができた。 ○サルの出没など緊急かつ継続的な見守り活動が必要な場合、依頼に対して、それぞれの立場で見守り活動に協力してもらえる対応ができた。	・マチコミを活用しての連絡、情報共有はとても良い。地域の方々の協力を得るとともに、保護者の安心にもつながっている。 ・加佐登地域の方々の協力体制は、杉の子でもたいへんありがたい。 ・地域住民を巻き込んだ活動は評価できる。もっともっと積極的に支援を求めていくとよい。 ・保護者との連携はできているが、自治会やまちづくり協議会との連携についても協議・構築できるとよい。	・児童の安全を確保するために、見守りに参加していただくよう継続して地域へ働きかけていく。
(6)学校運営協議会を中心としたコミュニティ・スクールの推進	学校運営協議会での協議に基づく改善 【目標】 協議内容の職員・保護者・地域への発信と具体的な取組の共有 【指標】 学校運営協議会各回で話し合われた内容を職員にも周知し、「学校運営協議会だより」を学校内外に発行する。 職員への周知率100%、保護者の周知率70%以上とする。	B	▲学校運営協議会やその活動の周知率 R4：53.2%→R5：58.4%、教職員は100%。 ・「学校運営協議会だより」を毎回メールやHPで発行しており、年々少しずつ周知されつつあるが、目標値は達成できなかった。 ○安全面など学校運営協議会で出された意見をもとに、教育環境を整えるなど改善に生かした。 ○昨年度よりPTA役員2名に学校運営協議会委員として参加してもらっており、保護者の意見が学校運営協議会に反映された。また、PTA役員会や地区合同委員会で学校運営協議会の協議内容などを貫流してもらったことで少しずつ活動内容が周知された。	・マチコミで学校の様子を知らせてもらい、よく分かってよい。 ・学校運営協議会委員、PTA役員や保護者の意見を反映しながらの改善案への取り組みはよい。 ・会議前に意見を求めるテーマや、支援を求める事項を、学校運営協議委員に知らせておくことで発展的な意見が出やすくなる。 ・学校運営協議会についての周知率を上げるためには、メールでのたよりの配信だけでなく別の方法や機会を考えていくことも必要である。	・白鳥中学校区学校運営協議会では、中学校区内の各校の安全安心について共通のテーマで協議していく予定である。来年度の学校運営協議会でも安全安心をテーマの一つとして、他校の取組例を参考にしながら協議を行う。
	地域の教育力の活用 【目標】 学校ボランティアの活用の推進 【指標】 学習支援ボランティア・読み聞かせボランティアの活用場面（種類）を昨年度より広げる。また、ボランティアの活用方法を構築する。	B	○学校からの依頼を伝える方法を確立して地域コーディネーターと連携し、学習ボランティアを活用した。 ▲学習ボランティアの方との都合が合わず、活用は昨年度並み。またICT導入により、実習や安全面に配慮が必要な活動への依頼が中心となり、活用場面の再検討が課題である。 ・図書読み聞かせボランティアによる読み聞かせ20日延べ58クラス。昨年度よりやや増。 ・実習支援、校外学習支援として学習ボランティアを9回活用。昨年度より減。	・学習ボランティアには登録しているものの、仕事をしている人がほとんどであり、なかなか参加できない状況である。保護者に限らず地元の時間的余裕がある方たちにも募集をかけて登録者を増やしていくことも必要と感じる。 ・高齢者の方たちをもっともっと活用してはどうか。	・ボランティアの方に都合をつけてもらいやすいよう、早めに地域コーディネーターに依頼したり、ボランティアによる支援を希望する単元や内容の年間計画を立てたりする。
(7)教職員の働きやすい労働環境づくり	総勤務時間の縮減 【目標】 業務の効率化 【指標】 時間外労働を全員が月平均30時間以内とする。月2回の定時退校日を設置し、定時退校を行う。（定時退校率90%以上）。放課後に行い1時間以内に終了を設定した会議のうち、1時間以内に終了する会議の割合を90%以上とする。	A	○12月までの平均時間外労働時間 R4：22.1h→R5：20.3h（昨年度比 - 1.8h） ○定時退校日での定時退校率 R4：98.3%→R5：99.8%（昨年度比+1.5%） ・月2回の定時退校に職員全員で意識して取り組んだ。スクールサポートスタッフの活用などで時間外労働が若干減少。 ○放課後会議60分以内終了率 R4：94.6%→R5：97.68%（昨年度比+3.0%） ・放課後会議60分以内終了に関しては、終了時間を提示し意識して取り組んだ。	・目標や指標を意識して教職員が取り組んでいてよい。 ・他県でも導入されているスクールサポートスタッフの活用が順調に導入されている。 ・時間外労働が短縮されている教職員が、どんな工夫をしているか還流するとよい。	・職員間でスクールサポートスタッフの活用を推進していく。それによって教職員の勤務時間を削減するとともに、任せられる仕事は任せていくという意識をもち、働き方を見直すきっかけとする。